

◎連合会・労協Gだより

第15回総会を北海道知床で開いた。ウトロはアイヌ語で地の涯、日本の最北端に、全国から、北海道の仲間の奮闘に連帯し、高まる労協運動への期待と関心にどう応えるか。そのために全国の活動から学ぶ教訓と課題・方針を明らかにし、確信と展望を共有し合いたいとの思いが一つになっていたからであろう。多大な時間と費用を使うことになったが、参加は、予想を大きく上廻って406名が結集してくれた。

「平成不況」は、これまでの政府・大企業の処方箋では立ち直れない。大規模な企業リストラが、ホワイトカラー層の整理、中小企業を含む海外移転による「地域経済の丸ごと沈没」、失業・雇用不安の増大などとなっていっそう深刻化している。

景気回復に明るさが見えたかのニュースも「雇用なき景気回復」という。雇用をつくれない企業とは何んなのか。儲け本位の企業社会の根源的問題にまでたどりついてしまったのではないか。精力的にすすめている全国縦断雇用シンポのとりくみはその実相を見事な位、リアルに教えてくれた。

これこそ、かつてなく高まってきた労協・高齢協運動への期待と関心の背景であり、そこに時代の要請、根本課題を読みとり、それに応えられる我々の運動の事業・経営全ての「刷新」と新たな「挑戦」をキーワードとして明確にする重要な解析を本総会を行った。

松本総会で、名称を日本労協にかえ、「他流試合」を自覚し、旺盛に外に打って出ることを決めて、この1年間の活動は、これまでの4年間を1年でやってしまったかの様に豊かで、団と組合員は、明らかに質的变化をとげた。ここから導き出される教訓を生かきすることで、中期計画最終年の爆発的とりくみが可能になると総括した。

反面、組合員が、本当に“主人公”になりえていないことへの直視を提起し、七つの原則の愚直な実践を通じて手にした「全組合員経営」を、運

動の出発点であり究極の目的と位置づけた。

95年の活動推進の中で、第二次計画づくりを全組合員の総括運動と事業計画づくりですすめることを方針とした。今年度の活動、第一次計画の完遂と、高齢者協同組合を全国展開で具体的にスタートさせることを柱に、雇用シンポ、協同集会が骨太く展開し、映画上映運動が毛細血管のように6-8行動、1、2、3運動の中で張りめぐらされることになるだろう。

懸案だった教育・学習システムが、連合会の体制強化と、研究所の協力をえて実現に向うだろう。

労協グループの本格的スタートの意義が、エコテック、パラマウントからのアピールと各団、組合員とのかかわりのなかで具体的なイメージとして結ばれてきている。総会会場のホテルに「石けん製造機」が納入されることになったが、別海の共同作業所で既に稼動していて、北海道労協とのかかわりがあってのことだった。センター事業団勤続10年表彰者への記念品は、パラの注文靴券50人分だった。これは、パラの注文靴システムづくりにつながるだろう。別海のベーコン、厚岸のアイスクリーム、鶴居村のエゾ鹿缶詰が「労協ブランド商品」に加わりたと言われた。

労協による、ものづくりへのこだわり、壊れるもの・儲かるものでない、環境・資源を考え、人と社会が必要とするものづくり、生産と消費が互いに見える関係—労協の「産直」ができるようになったことの、組合員への意識の定着と、作る側の労協への自己変革の過程としてとらえられる。

かつて、第一次中期計画をつくる作業で、21世紀を展望するとき、1995年が大変大きな節目になると見てきた。そして、人類の危機の進行と、激動する時代に於ける我々の中心的課題を、雇用・高齢者・ごみ資源問題として、それに真正面から挑戦し、新しい生き方働き方を探ってきて、改めて、95年が、労協運動の発展にとって大きな節目になるという思いを強くしている。

本年度は中期計画の最終年である95年に向けて意欲的に事業・組織・経営の全てを「刷新」し、「挑戦」し、95年は全く新しい地平に、労協・労

協Gを置くことになるように奮闘すること、それが今総会が定めた方針だろう。

中田宗一郎（労協連合会・専務理事）

◎センター事業団だより

センター事業団の第9回総代会を知床で行った。事業高54億、組合員1901人、11ブロック60事業所というのが現在のセンター事業団の数字である。正味1日の総代会で十分な議論が保障できないのが理事会の悩みである。①93年度のまとめ②93年度決算③監査報告④94年度方針の他3つ特別議案が提案された。昨年はセンター事業団設立以来という悪い経営状態を下半期の事業所ブロックの厳しい経営努力で何とか配当が出せるまでに盛り返すことができた。全団員を組合員に！という定款改正の意義は大きかったと評価している。映画「病院で死ぬということ」の上映活動、高齢者協同組合、新規事業への挑戦、全組合員経営や良い仕事の実践などが参加した総代から生き生き報告され、事業・運動の年々のひろがりや様々な人々からの期待を全国の仲間が実感した。永戸専務いわく「基本に徹し、くじけず、足早に」というのが今年の特徴になるだろうということである。良い仕事の崩れは論外である。総代会で明らかにされた方針に今年も全力で臨まなければならない。夜の交流会では地元アイヌの方々や沖縄からサンシンを持ってやってきた仲間との楽しい歌と踊りが舞台を盛り上げ、永六輔さんが20年ぶりに作詞したという「はるなつあきふゆ」を参加者全員で合唱した。会議のスケジュールが過密で知床の大自然を充分満喫できなかったのは残念だったが、一味違った思い出深い総代会となったようだ。

事業所ブロックでは6～8月の取組（①第3次自治体集中行動②良い仕事の自己点検・相互点検運動③映画・高齢者協同組合の組織化④増資運動）が始まり、総代会の報告や94年度の事業計画の補強など忙しい日々が続いている。映画の取組では酒田市の上映会が1000人近い参加で成功して

いる。東京葛飾の上映会も地元の方々の積極的な取組で、高齢者協同組合へつながらる人のネットワークが作られ始めている。映画の取組が今年も運動を広げる牽引車の役割を果たしている。

本部では総代会の成果の上に乗って94年度の獲得課題を鮮明にするための第1回ブロック本部長会議を合宿で行い、100億の事業高にめどを立てること、全組合員経営に徹することなど意思統一をした。更に94年度の「機構と人事」が第1回事業所長会議に向けて固められている。新しい任務につく所長、事務局員が慌ただしく異動となるのもこの時期からである。今年は35人の新事務局員候補の配属もあり、役員クラスの異動は少ないものの相当顔触れが変わってきた印象を受ける。本部に1年間いた昨年の新人2名も新たな任務で異動していった。一人は仙台岩切事業所の所長として、もう一人は秋から始まる予定の新しい仕事につくため鶴岡医療生協で研修を受けている。1年は短いようだが若い事務局員を大いに鍛え成長させているようだ。

今年も新卒採用の季節がやってきた。ここ数年は5月から始めていたが、今年は6月からにした。就職戦線に薄日などと書かれ始めているが、1月ごろから届く資料請求のハガキは4000通を越えた。昨年の3倍である。返信の宛名書きも大変である。1通のハガキが素敵な出会いをもたらすかもしれない。おろそかにできないところである。会えるものなら全ての人に会って労働者協同組合の説明を行いたいと思うが、物理的に限界にきている。説明会参加のために事前にレポートを課すなど、例年になく強硬手段で今のところ何とか人数制限に成功している。

坂林哲雄（労協センター事業団・事務局長）